

# 山本有三とキリスト教

——別居中の妻はなに宛た大正八年の書簡を中心に——

田邊 匡

一

山本有三の作品に関して、これまで私が書きたためて来た拙い研究の中から数編を一冊にまとめ、平成八年三月に『有三文学の原点』と題して出版したところ、それを読んで下さった、元小学校教諭でクリスチャンの、Mさんという一女性の方から次のような要旨の示唆的なお手紙を頂戴した。

(前略)

『有三文学の原点』で一番好きな言葉、それは

「人生は死ぬことじゃない。生きることだ。たつたひとりしか無い自分を、たつた一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら人間生まれてきた甲斐がないじゃないか。」(『路傍の石』) これは新約聖書にあるイエスの福音のみ言葉で、

「たとえ人が全世界を儲けても、自分の命を損したら、なんの益になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を

買ひもどすことが出来ようか。」(マタイ伝第十六章二十六節)

「神は、死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。」

(マタイ伝第二十二章三十二節) から来ているものと思われる。また、有三はいみじくも

「世の中では、うそをついていなくてはならないことがしばしばあるんだ。うそのほうが真実よりももつと真実のことがしばしばあるんだ。」(『真実一路』) とか、

「私が何よりも残念に思うことは、自分が自分に生きなかつたということです。自分に生きるということは、毛頭利己的に生きるとか、我俚に暮らすという意味ではありませぬ。自分に忠実に生きなかつたということです。もつと平たい言葉で申せば、うその生活をしたということです。」(『真実一路』) そして、

「人間は、或いは広く生物と言つてもいいが、自分の一番大事な生命を維持して行く為には、他の一番大事な生命を奪つているのだ。そこにあらゆる罪惡の芽があるのだ。」(『女親』)

こうした有三の二元論は、旧約聖書の真実の神キリストと、悪魔の神エホバの二元論から来ており、これが新約で一元論化していることは、山本有三はキリスト教を信じる二元的宗教家であったのか、クリスチャンであったのか、どうかは知らないが、少なくとも神学者としての牧師ではないことが分かりました。(中略) 新約の福音では神を一元的にとれば、物は必ずそれに付随して恵まれることになっており、一元化への試練として耐え忍ぶことが必然化されているし、十字架のイエスはそのため「死んで救って下さった」贖罪を説く、それが福音信仰で信ずることのみ一元化が達成される。つまり有三の言うところの「すわり」や「無事」が約束されているのではないでしょうか。このようにみえてくると、山本有三という人は、キリスト教を信じる二元的宗教家であったのではないだろうか。(以下略)

これを読んだ時、私の頭の中にすぐさまひらめいたのが、以前唐木順三の評論『山本有三』(昭和七年)にも、

「有三には二つの思想が一貫してつき走ってゐる。ひとつは自然的事実としての生存の闘争である。他は、道德的善、正義が何故に容れられないかへの懷疑、及びその延長としての邪悪への徹底的挑戦である。この自然的事実と道德的要求が、二元として、或は葛藤として彼の初期の戯曲を構成する。」

と、有三文学の特質を指摘されていたのと、有三初期の戯曲『生命の冠』(大正九年)の題名の由来が、

「なんじ死に至るまで忠信なれ、さればわれ生命の冠をなんじに与えん」(ヨハネ黙示録第二十節)

からとられたことが、作品の最後に注記してあったことである。この作品では、しけの為に遭難した船の船長が乗組員全員を、救命ボートで脱出させ、自分一人船に残って船と命を共にした事件を扱っており、

有村 「私たちから見ると、人のやれないことをやったように思えますが、船長自身にとつては、それが自分のやる、あたりまえのことだったのでしょ。」

匹田 「いや、そのあたりまえのことが、なかなかやれないのだ。えらい人というのは、大きな仕事をやった人ではない。なすべきことを敢然としてなした人だ。」

(中略)

金次郎 一仏教のほうでは、善因善果、悪因悪果などと言うようですが、実際の世の中を見ると、よいことをした人が必ずしもよくなっておらず、悪いことをしている者が、かえってよくなっているという実例は、たくさんあるようです。わたしはこういうことに遭遇するたびに、何がなんだかわからなくなってしまう。そして正しいことをするのは、バカらしいような気がしてならないのです」

匹田 「さよう、そういう不合理の事実を、われわれは、しばしば目撃しますね。(略) わたしは、よいことをす

ればよい報いがあり、悪いことをすれば悪い結果が従うものと、かたく信じております。しかし世の中のととは、あまりに複雑で、あまりに深いから、わたしが信ずる通りにおこなわれていません。従つてその問題は、わたしにはとてもわかりません。けれどもただ一つ、わたしにわかっていることがあります。それは、よい結果が来るからよいことをするのでなく、悪い結果が来るから悪いことをしないのではない。結果のいかにかわらず、人は、しなくてはならないことをしなければいけないということです。なあ有村さん、そうではありませんか。」

この『生命の冠』を執筆することになった経緯に関しては、大正八年の七月から九月にかけて、丁度その頃有三是義父、本田増次郎との確執が原因で、別居中の愛妻はなにあてた有三からの手紙の中で、触れられているのである。

「此間久米は書く材良マツリがなくなつて困つたといつてゐたが、私はまた書く材良マツリがあり過ぎて、どれから書いたものかと迷つてゐるのだ。『未決監』『三人兄弟』『大罪』など教へると大分ある。しかしどれも大物なだけに骨が折れる。例の“折れ”として働け”といふ私の根本思想を今度は先づ書いて見ようかと思つてゐる。」(大正八年七月十四日付書簡)

「昨日から創作熱が汪溢して、頭が熱してゐる。此分でゆけば予定の期日までに十分書けると思ふ。『香巖上樹』は後に

廻はして、商人の徳義問題を材にしたものを書くことに決めた。題は未定だが『殉教者』としようかとも思つてゐる。(略)私はどうも圧迫されると、うちに潜んでゐる正義慾が沸騰して、創作する気になる。」(大正八年九月十二、三日頃推定書簡)

この書簡の中にある『未決監』が『嬰兒殺し』となり、『殉教者』が『生命の冠』となつて、共に翌大正九年に結実を見たのである。そこで今回は、前記したMさんの手紙から一つのヒントを与えられ、無論神学者でもクリスチャンでもない有三が、キリスト教並びに聖書などに一時期かなり興味と関心を抱いていたのは何故か、またどのようにしてキリスト教とのかかわりを持つに至つたのか、その辺のところを探つてみたい。

## 二

有三生前中は、彼の性格上自筆の手紙類や直筆原稿が、古書業界で売買の対象にされることを極端に嫌つたため、専ら妻の原稿が、原稿の清書はもちろんのこと、公私にわたる手紙類一切を代筆していたので、当然のことながら自筆原稿や、書簡類が少ない作家として知れ渡つていた。

ところが今回、有三とはなが結婚した大正八年前後に、有三からもらつた手紙のすべてを、はなが「私の大切なラブレター」と称し、生涯の宝物として秘蔵し肌身離さず持ち歩いていた、おび

ただし分量の手紙のあることが判明した。それははなの没後、娘婿にあたる永野賢氏が整理し、有三研究のための基礎資料を目的として、これら書簡のすべてを公表されたことで、有三にも自筆書簡が多く実在することか、若き日の有三が噂に反して実に筆まめであったことなど、知られざる一面が判明したのである。更には初期戯曲の代表作『生命の冠』や『嬰児殺し』の誕生したいきさつから、その主題の根幹とも言える有三とキリスト教とのかわりなどについても知ることが出来たというわけだ。

さて、本題に戻って有三がキリスト教とかかわりをもつようになったきっかけは、大正八年三月八日に結婚式を挙げた愛妻はなの実父本田増次郎が、有名な英学者で、クリスチャンであったことに由来する。また増次郎にとっては、一人娘で眼の中に入れても痛くない愛娘「はな」の名は、増次郎が第五高等中学校教授時代に親交をもった、宣教師のハンナ・リデル女史にあやかつて名付けたものだという<sup>2</sup>。そのはな自身も「洗礼を受けたいとの強い願望を持ち、日曜日ごとに教会に足を運ぶ習慣は持ち続けた」とはその手記にも記されているところである。

井岡はな、彼女は本田増次郎が肺結核治療のため、神田駿河台の杏雲堂病院に一時入院した際、その事務員を兼ねた派出婦だった井岡ふでとの間に、明治三十年九月二十九日生まれたが「悲しいことに宗教上のおきてにより、正式結婚が成り立たず、ついに私は私生児として届けられる」と、はなの手記は記している。有三とこの井岡はなの結婚は、敬虔なクリスチャンである増次

郎が、娘のつれあいとしてこれ以上の男は得難いという直観から、婚約中の有三の人柄に惚れ込んで、とんとん拍子に話が決まったのだったが、いざ嫁にやってみると、有三の文学者としての自己中心的性格から来るところの冷酷さを見てとり、父親として一種の嫌悪感と、掌中の玉を奪われた恨みが加わって、新婚生活わずか一ヶ月程で娘を呼び戻し「再び山本へ戻ることはならぬ」と、二人の離婚を宣告する一幕があるなど、その出発は決して平穏なものではなかったのである。ところが皮肉にも、そうした親子の確執を経験したおかげで、有三はキリスト教との関わりが出来、『生命の冠』など初期の名作を生むことが出来たのであった。

婚約中の一つの事件として、はなが本郷の有三宅を訪れた大正八年二月八日は、三十七年ぶりという大雪となった。夜に入りますます雪は降りしきつたので、有三が泊つて行けと引き留めるのを、いかに婚約者同士の間柄であろうと挙式前に若い女が男の家で一夜を過ごすわけにはいかなかったので、振り切つて、はなは大森へ帰った。はなのとつた行動は、当時の社会通念に従つたまでであり、また父の教えでもあった。帰ろうとしたとき、有三がはなの体を求めた。はなは動転し拒んだ。しかし有三は強い。情が薄いと非難した。はなは強い衝撃を受け、帰宅後父に出来事のあるままに訴え寝込んでしまった。聖公会のキリスト教信者である増次郎にとつても、それはショックであり腹立たしいことであつた。そこで思案の末、増次郎は感情のたかぶりをおさえ、つとめて静かに父としてまた人生の先輩として、更にはクリスチ

ヤンの立場で有三の独走を戒めるべく、清潔な結婚ということについて、自分の結婚観を説く長い手紙をしたため、有三に發送した。

(前略) 扱一昨日ゆるゆる意見交換の結果双方とも一層の領解を得てかかる事ありてこそ約婚にも結婚にも意義を深うするなれと満悦致し候小生は父として年長者として將た新旧の思想を多少とも諒解し得る人間として双方に同情し其前途に多大の光明希望を認むるもの也由來思想の人は俗界因習と相容るる能はざるを常とし孔子亦『容れられずして然る後君子たるを見る』と謂へりされど御同様の懷抱する思想に共鳴するものは日本にも稀なりとせず忽ち殉教者の絶望的態度を取りて愛妻の外吾に同情しくるものなからんとやうに思ひ過る程の必要はなからん但し妻が夫の主義精神に共鳴し滿天下迫害の中にも激励支持しくる事は何よりも願はしき事、又マホメットの妻に於ても其外にも幾多著明の例ある事なれどもこれのみを力と頼んで結婚すると言ふは多きを妻に求めずぐる事にて勇氣あり確信ある男子の寧ろ恥辱とする所なるべし吾が山本君に於て豈に如斯の事あらんや要するに濁世と迎合して物質の榮華を求むる底の男ならざるを觀取して貧苦の中に精神的の悅樂を共にしたしの願望より婚前によく諒解し置くを求められし事ならん(中略) 愛は自ら求めず与へんとして其結果は大に自ら獲る事なり命を棄てて命を得る事なり山本君と花子の間には既に此愛着の存立するを觀る相互の同

情諒解は此裏より泉の如く湧き出でん事疑なし第二の問題と考へたる熱情の表出と言ふ事も上記の鍵にて開かるる事にて異性の間には進取退守の差あり個人によりて多少パッションイトであると比較的否ざるとあり趣味又は主義の上より熱情を口にし形に現はすを野卑と考ふるアングロサクソン人の如きあり自然なり美的なりとするラテン民種の如きありもし花子に向つて結婚前自ら求めて愛人を抱擁接吻するやうに期待さるるなら無理な注文ではなくとも恐らく何国の女と結婚しても約婚しても得られぬ事と思はる決して彼が愛情を欠けるに非ず卑屈なるにあらず(中略) 花子の結婚式挙行の後はその心配なからんと言へるは此点に就て山本君が一般の女子及び彼一人を誤解して愛情同情なしとせらるるを悲むの意あらんと解し是亦小生は心配致し居らず花子も言わず思はず恐らく山本君も自覚せざる事にて小生の独り自ら念々し居る事は花子や小生の安全弁として多大にもち居るヒューモアが山本君にも解せられ楽まれん事も基督は生涯笑へる事なし(聖書に記す処にては)故に悲哀の人なる別名あり独人英人の如く人生を尤も真面目に考ふる国民だけヒューモアの安全弁が発達して居る事は御承知の如し(中略) 小生が娘をいたはり之に同情して自ら救はれたるよりも山本君が妻より得らるる所は更に深く厚きものあらん而して妻を我に同化せしめんと欲せば先づ其美点長所に敬意を表して醜点短所は自然に徐々に消滅するを待たるるが急がば廻れの捷徑かと存じ候敢て自慢

するでも過信するでもなく小生は率直に申すが花子に山本君よりも氣心のあふ配偶は得られぬと思ふ如く山本君に於ても花子よりも諒解、同情、愛情に富んだ妻を発見する事は恐らくむつかしき事ならんと信じて居ます。小生は人力の及ぶ所を悉して兩人の前途を多幸ならしむべく応援します山本君に於ても当方父子の切なる感情は十分酌取って此無遠慮の手筈を善意に解したまはる事を信じます(傍点原文)

(大正八年二月十四日、増次郎から有三あて書簡、封書)

このように、多少の曲折を経たものの有三と、はなの結婚式および披露宴は、予定どおり三月八日に田端の「天然自笑軒」で行なわれた。

### 三

「結婚といふものは雪の朝のやうなもので、見た目は綺麗ですが、雪解けの後は決して綺麗なものではありません。綺麗どころか却て道が悪くなつてたまりません。」

(大正八年一月十五日付、有三からはなあて書簡)

婚約中の有三からもらつたこの手紙の中で教えられて、はなは観念的には理解したつもりだったが、綿帽子をとり新婚生活に入つて雪が解け、地面が現われると、そこには有三の予告したとおり「ぬかるみ」が待ち構えていて、彼女はすぐさまそのぬかるみにはまり込んでしまった。新しい生活には、婚約時代の甘いム

ドなどみじんもなかつた。有三は演劇にたずさわる文士として、また十歳の年長者として現実的な体験を積んできている。一方はなは、幼くして母と祖母に死に別れて、十五年もの苦勞を重ねたが、アメリカ仕込みのフェミニニストである実の父親と、三年間水入らずで暮らし、クリスチャンタイプのアラトニックな理想主義者であつたから、二人の間にはかなりの幅の溝があつた。

有三にしてみれば文学に打ち込むことが生活そのものであり、作家活動がすなわち生きることであつた。自分の家庭生活が世俗的常識的なものでないのは、真実の文学を生み出すための当然の姿なのだという信念を、彼は持ち続けていたから有三の生活には昼もなく夜もない。徹夜も朝寝坊もしたい放題である。一日二食でしかも時間を選ばない。布団は敷きっぱなしで、自分は寝ながら、はなに本を読ませる。夜中であろうとおかまいなしである。おまけに根が癩癩もちときているから、虫の居所が悪いと、気にさわることは何でも怒鳴りつける。こうした有様で二十四時間の奉仕を要求されるのだから、たまつたものではない。雪解けの後のぬかるみは、足を抜くことさえできない泥沼であつた。はなはわずか十日間で心身ともに疲れはて、十一日目の三月十九日、身体の不調を理由に実家へ帰つた。いかに我慢強い彼女でも限度というものがある。ともかく実家で身体を休めたいと考えた。

丁度そのころ、父の増次郎は、パリの講和会議に赴く西園寺公望全權大使の随員の一人として渡欧することが決まつており、はなはしばらく父に会えなくなると思つたら、「いったん嫁いだ以上、

里の敷居はまたぐな」との教えも忘れて、無性に父の顔が見たくなつたのである。一方、はなから話を聞いた増次郎は、有三の自分本位な温か味のない性癖に言い知れぬ嫌悪感を抱いて激怒し、そんな冷酷無残な男のところを娘を置いておくわけにはいかないと、はなを引き取る決心をかため、渡欧を目前にひかえた増次郎はまず、はなの身柄を安定させておかねばならないと考え、それまで私生児であつたはなを認知して、本田に入籍させる手続きをした。この時点で増次郎は、はなを山本へは渡すまいと決意したのだった。

外遊の途につくに先立つて、つぎに増次郎が画策したことは、はなの身柄を有三の手の届かない場所に匿うことだった。そこで大阪市内の玉造に住む知人で実業家の白藤長次郎宅に、はなを預け増次郎は四月末、ヴェルサイユ会議の行なわれるパリに旅立っていった。

白藤家には何人かの子供がおり、はなはここで生れて初めて、和気あいあいとした本当の家庭のあり方とその暖かさを味わつた。白藤家に落ち着いてからしばらくして、はなは姑のナカにあつて、これまでのお札と簡単な近況報告の手紙を書いた。匿われている身であるから父には申し訳ないと思つたが、このまま縁が切れてしまうことに對する不安も手伝つて、白藤方の住所を明記した。母からその手紙を見せられた有三は、やむにやまれぬ気持ちに駆られて、はなにあつて長文の手紙をしたためた。増次郎も旅先からひんばんに便りをよこした。父と夫との手紙を読むはなの

心はゆらいだ。有三とこのまま別れてしまつたら、この先自分はどうなるのだろう。一体自分は何をしようというのか。これまでのこと、将来のことを思索すると、有三の愛の深さがつくづくと身にしみた。はなは自分が有三をこよなく愛していることに、今更のように気付いたのである。

はなは、日曜ごとに教会に通い、宮川経輝牧師の説教に耳を傾け、讚美歌に涙を流した。その教会で、白藤の知友でクリスチャンの星野行則夫妻と邂逅する。このことが、はなの前途に光明をもたらすこととなつた。それは、はなが住吉に住む星野夫人を訪れて、苦しい胸の中を打ち明け有三から来た二通の手紙を見せて助言を求めたところ、「神の意志は父の命令よりも重く、夫にくのが神の意志に従ふことだ」と言う夫人の意見を聞くことが出来たことである。

#### 四

自分が帰国するまで大阪に居るよう命じた父に背いてまで、「神の意志」に従い六月初旬に、はなが白藤家を辞して東京へ帰る重大決断が出来たのも、これひとえに有三から来た二通の手紙から、有三の真実の愛情を確かめたからに外ならない。ではそのはなの心をとらえた有三から、はなにあつての心打つ長文の手紙を見てみたい。

私はおまえにこの手紙を書く、(中略)私はこの手紙を書

かなければ倫理的に死ぬからだ。この手紙を書くことは私の生きる道だ。そして同時におまへの生きる道だと信ずる。私は是非ともこの手紙を書かなければならないのだ。私は手紙は人格の発露としていつも真心から書く。この手紙もまた実に真心の滴りだ。そして恐くは私の一生のうちに於て此手紙は最真実の流露したものの一つと信ずる。私はこの手紙を真実を以て書く。純真の心を以ておまへに對する。どうかおまへも真心を以てこの手紙に對してくれ、区々たる外聞に煩はされずに真心から私に對してくれ。

四月十九日夕すがすがしい心持で大森に訪れた。ところが突然父上から思ひもかけぬことを切出された。全く思ひもかけぬことであつた。私は父上と對座しながら靜かに考へた。そして父上の帰國せらるる時までこの重大問題を待つて下さるやうにお願ひした。巴里に立つ一週間前の短かい間にこんな重大事は決せらるべくもないからだ。越えて二十二日父上と再度この問題について会見した。自分は無論私の説を清く容れてくれるものと深く信じてゐた。且つはその前夜私はおまへを大森に訪ねて留守に置手紙をしておいたから、私の心中は父上にもおまへにも十分了解のいつてゐることと思つてゐたからだ。ところが予期に反して父上の口上はその反対であつた。自分は愕然とした。こんなに自分は眞実を以て對してゐるのにどうしてそちらにはそれが汲入れられないのであらう。それから母がまた大森に訪ねた。矢張受け付けられない。

(中略) その時自分は考へた。離婚はおまへの意志であると父上はいはれるけれど、私からも母からも再三おまへに會はしてくれといふのに一度も會はせない。居ることが分つてゐながら會はせない。會ふといふのは何もおまへを引張つて連れて帰らうといふ意味ではない。これは誤解から起つてゐることに違ひないから、本人のおまへと懇談したならば屹度分るにきまつてゐる。それが幸福と平和との近道だと信じてゐるから何度も何度も頼んだのだがどうしても會はせない。そんな理不尽なことをするならばこちらも煩張つて離婚は出来ないといひ張らうし、荷物も返さぬと言はうと思つた。しかしそんなことをしては一月でも二月でも父と呼んだ人に申訳がない。殊には父上は甚しい神經衰弱にかかつてゐる。かつて加へて一週間後には仏蘭西へ向け出發される筈になつてゐる。出發前に何もかも片づけて行かうとしてゐる父上に、そんな反抗的なことをすれば、病弱の父上は長途の船の上でどんなことになるかもしれない。国家のことで外遊する人の私の情の為に苦めたり不慮の禍に陥らしめたりするやうなことがあつては、自分としては此上もない悪事を働くことだ。最も恥づべきことだ。かう自分は考へて何もかも運命に任せることにした。父上の帰來まで半年を待つて貰はうと思つたのに、それはどうしてもきかれない。強ひてその間をつないでおかうとすれば、父上に反抗することになり、ひいては父上を害ふことになる。切羽詰つた自分是否応なしに離婚を承



諾せざるを得なくなつた。自分のこの切ない心持を私は誰に訴へたらしいのか、母にいへば母を悲しませる。友にいへば愚痴になる。ある時は有島君のやうにこの事実をありのまま小説にして世間の公平なる批判を乞ひたいといふ念慮も何度か起つた。しかしそんなことをすれば關係の人に累を及ぼす。人がモデル問題を惹起すことに、人に迷惑をかけるやうな芸術は決して芸術でないと常に高唱してゐた自分はそんな非芸術的なことはしたくない。若し書くならこの苦しい心持だけは十分に活かすとしても決して人に迷惑をかけてはならない。しかしそんなことは事実の上に立つてゐる今の自分には出来ぬことだ。書けばどこかに当りが行く。そんなことをしてはならない。断じてならない。運命だ。忍従せよ。諦念に入れ。かう冷静な理性がささやく。そしておまへにも度々話したことのある「祈れそして働け」といふ思想が寂しく私の心を領した。おまへと別れた後の私は日々「祈れそして働け」といふ尊い信仰に従つてゐる。そして毎日祈り毎日働いてゐる。それからおまへが飽き足らず思つたといふ朝寝も、二食も今はすっかり止めてゐる。朝も早く起きるし、食事も三度つづしてゐる。朝起きる度、三度の食事をとる度毎に、「ああ、おまへは去つてもおまへは確に私の中に生きてゐる。おまへと共にある」とかう思はない時ではない。さういふ意味においておまへが私に植付て行つたおまへの苗は私の一生を通じて枯れないであらう。たとへおまへと私は永久この

ままでゐなければならぬとしても。しかし二人はどうしても離れてゐねばならぬものだらうか。合一しては不合理のものであらうか。(中略)何故私は離婚を承諾したのだらうと、その事許りを後悔した。私はどんなことがあつてもおまへを離婚しないといつた。その通りだ。私はおまへを別れるつもりで貰ひはしない。たとへどんな事情が起らうとも断じてそんなことがあつてはならないと堅く決してゐた。それなのにどうして承諾してしまつたのか。私の早計だ。私の早計だ。たとへどんな事情があるにもせよ、父上がどんなに心痛するにもせよ。承諾したのは早計だ。これは深くおまへに謝罪する。私としては深く謝罪しなければならぬ事だ。(中略)私は嘗て人生を云々し、倫理を云々してゐながら一人の女さへ救へ得なかつた。しかし今は強い。私は私の翼の下に育んだ小鳥をいはいはれもなく、果しない大空に追ひやることは出来ない。私は往古の騎士のやうにどんな障礙があらうとも是非ともおまへを私の翼の下に再び返さなくてはならない。それが私の責務であり、それが私の正しい道だ。徒らなる謙讓や情義にかまけて、妻たる人を一生悲境に陥らしめてはならない。この長文の手紙を今日おまへに書き送る所以のものは実にここにゐる。未練と人はいはいはいへ、私は真心からこの手紙を書く。(中略)要はおまへが私を愛することが出来ないかどうか。もう一度私の懐に返ることが出来ないかどうか。それを聴きたいのが私の眼目だ。おまへが私を愛することが出来

有三は二度目の手紙をしたためている。

(前略) 私の所に走ればおまへは全部私にたよるより道はないが、「私に確に引とれるか」とこのやうにおまへは問ふてゐる。これも恐く深切な奥さんが指図して下さった配慮と思ふが、実によい事を問ふて来てくれた。勿論私として一生おまへを引とらないで何としよう。引取れぬようならば私はあの長い手紙を書きはしない。私ももう三十を越してゐる。その上多数の学生を指導する身だ。出まかせの事を筆にするやうな男ではない。その点はおまへとしても十分に分つてくれると思ふ。(中略) おまへにしても私にしても二人一緒にゐたときは未だ本當に分らなかつたのだ。おまへのよい所も、私のよい所も今度別れて始めてお互に知悉し合つたのではあるまいか。この別れは苦しいけれども試練としては実に尊い有難いものであつたと思つてゐる。私は生一本に生きて行きたい。これは学問にたづさはつてをり、眞実を元とする文学に生きるものにあつては是非ともさうなくてはならぬことと信ずるからだ。私は上手に世を渡るよりも正しく世を渡ることとを尊いことと思つてゐる。今の世の中は正しく渡るよりも賢く渡るといふことが得のやうだ。しかし損得のみで生きて行くつもりならば、何も学問や文学に生きる必要がない。(中略) 自分が正しいと信じててもそれが弱い人を苦しめる以上決して正しい道とは思はれなくなつて来たからだ。ここに私の深い懷疑があり、ここに私の大なる問題が横はつてゐる。こ

ず、私に返ることがどうしても出来ないといふのならばそれはもう問題ではない。しかしおまへにその考があるならば私はそれに向つて衷心から働かうと念じてゐる。そして私のこの眞実はおまへに通ぜぬ筈はない。然もおまへは私を愛してゐる。それである以上おまへは是非とも私に返るべきだ。眞実が通ずれば十七文字でも雨を降らす。私の文は拙くとも、私の眞実の通ぜぬ筈はない。通ずる以上おまへの返らぬ筈はないと深く深く信じてゐる。大事のことはおまへが私を愛してゐるかゝぬないかの問題だ。(中略) 言ふことは余りに多い。しかしもう筆を擱くとしよう。私はおまへを思ふことに片見の蓄音機を廻はしてゐる。そして寂しくありし日を忍んでゐる。おまへは帰つて私の為にあの蓄音機を廻はして見る気はないか。母も心からそれを待つてゐる。母も手紙を書くべきだが目が悪いから控へる。凡ては僕の手紙で推してくれ。但しわれわれは無理やりにおまへを引戻さうといふのではない。帰ることが却つておまへに辛いならばそれは止むを得ないことだ。しかしこれは一生のことだ。どうかおまへも慎重に考へて真心から返事を書いて欲しい。

有三

(大正八年五月十日頃、有三から大阪の華子あて書簡)  
 はなは、この手紙を受け取つて心の底から喜びを感じた。それにしても、有三の愛の眞実をもう一つ確かめておきたい。日常生活態度を悔い改めるといふが、本當なのか、そこでもう一度手紙をほしいと、彼女は書き送つた。それに対して五月の末日付で、

の問題が解決が出来た時私は立派な人間になれると信ずる。同時に立派なドラマチストになれると信ずる。この深遠な問題に足を踏み入れさせてくれた神に感謝する。(中略) 今度の別離によつて、おまへは私をよりよく理解し私はおまへをより深く理解することが出来たと信ずる。その理解が私にこの間の手紙を書かせ、その理解がおまへに今日の手紙をかかせたのだ。そしてお互にお互を理解すると共に人生の本旨の一端をお互に伺ひ知ることが出来たのは、真に感銘すべきことと思ふ。今日再びこの手紙を書くのも実にその本旨によるのだ。(以下略)

(大正八年五月三十一日付、有三から玉造の、はなあて書簡) こうして、はなは六月初旬、父の忠告に背く結果となつたけれども東京へ帰つた。無論ただちに山本家に復帰するのではなく、大森の留守宅に帰り、手紙のやりとりをしながら父増次郎の帰国を待つたのである。

おまへに内村鑑三氏の「内村全集」を是非買ふことを勧めらる。また一巻しか出てゐないが、基督教に對して最も深い理解を持つてゐる氏の著書だからおまへには別していいと思ふ。理解の深い点ではトルストイなどよりも遙に進んでゐるといはれてゐる。私も是非近く読んで見るつもりだ。但しこの人は教会は認めない主義だ。それは承知してゐて欲しい。

(大正八年六月十六日付、有三からはなあて書簡) 内村全集を読んでゐる内に「大罪」といふ戯曲を作らうか

と頻りに思つてゐる。勿論大罪のことを内村氏が論じてゐるのではない。私があれば読んでゐるうちに、さういふ考が出て来たのだ。大罪といふことは真に自分の行くべき道を捨てて、屈服することをいふのだ。即神を捨てることだ。

(大正八年六月三十日頃、有三からはなあて書簡) 有三の強い力にぐんぐん引き寄せられ嬉しい反面、父への背信という罪の意識のあるはなにすれば、父の帰国後のことが不安であつた。そこではなは、父が帰国する前に有三とのいまの關係を知らせておかねばなるまいと考へた。そして洗礼を受け神の力にすがりたいとの強い願望を持ち始めた。日曜日ごとに教会に足を運ぶ習慣は、東京に帰つてからも持ち続けていたから洗礼を受けることによつて、これまでの罪障を洗い落としたのであつた。ところがさういつた形式的なことに批判的な意見をもつてゐる有三であるから、無教会主義の内村鑑三を読むことをはなに勧めたのである。

「内村全集」も持つて行かう。今のおまへの心持には「内村全集」は最もよい。屹度慰安をうることが出来る。同時に強くなる事が出来る。

(大正八年七月十四日付、有三からはなあて書簡) (前略) 平靜に考へて私の取つた態度は、少くとも延期をさせたことは、おまへの夫として、おまへを最も愛するものゝ立場として、最も當を得た所置だといひ得られると思ふ。お

まへは仮に洗礼を心からうけようと思つてゐるとしても、おまへの親近者としておまへに最も深切な注意を与へることは、極めて適當なことであり、且つまた、洗礼は明日でなくてはならぬ性質のものでないから、私のいつたことは決して反対の爲の妨害でないと思ふ。〔中略〕私としては先づおまへに洗礼の愚を極論して注意することは、決して束縛とは思はれない。そしておまへが私の論を正論と認めるなら、洗礼は控へるがいい。また私の論を否定する丈のものを握むことが出来。私よりもより以上進んだ信仰に這入つてを、どこまでも洗礼を正しとするならば、洗礼をうけるがよい。しかし兎に角私としては一応、自分の純真な宗教観から止めない訳にはいかない。

（大正八年十月十八日付、有三からはなあて書簡）

手紙見た。兎に角延期してくれたことを嬉しく思ふ。私のいふことは決して信仰の自由を束縛するものではない。バイブルを読むな。キリストを信するなといふならばそれは束縛に相違ないけれども、その点は大いにやれ、大いに深まれといつてをるのだから、私は十分おまへに信仰の自由を与へてをる筈だ。ただ一形式たる洗礼に反対するからといつて、それはおまへを拘束するものではない。洗礼をしなくつてもキリストは信ぜられるし、聖書も読めるのだ。否、さうあつてこそほんとにキリストを信じ、本当に聖書が読めるのだ。〔中略〕それからおまへは私の妻であるといふことを深く感銘し

てゐて貰はねばならぬ。それは妻だから何もかも私の通りになれといふのではない。私のやうな精神生活をしてゐる者の妻であれば当然おまへの思想は進んで行く。従つて必ず教会を捨て、洗礼を捨てる時が来るに相違ない。私はそれを最も恐れるのだ。現に有島武郎氏などは教会を捨てた随一人ではないか。しかも同氏は決してキリストを捨てたのではない。否キリストを信すること厚ければこそ、教会だの洗礼だのといふやうなものは放擲してしまつたのだ。その顛末は『死とその前後』に書いてある。おまへも一度読んで見るといい。それから私の薦めた西洋の小説は多く、キリストを信する人が書いたものではないかと反問して来たが、如何にもその通りだ。ドストエフスキイ、トルストイ何れもその通りだ。しかしそれは洗礼だの、教会だのを通してキリストを信じたのではなく、聖書を通してキリストを信じたのだといふことを深く心に置いておいて貰ひたい。殊にトルストイなどは全く教会を認めなかつた人ではないか。ただ聖書にたよれ。おまへの心にたよれ。教会だの洗礼だの、形式に捕はれては駄目だ。

（大正八年十月十九日付、有三からはなあて書簡）

端書見た。明二十三日は休み、二十四日の金曜は昼から午後五時迄学校、あとは在宅、二十五日から来月三日迄はいつも在宅だ。但し創作のことについて、水産講習所へ是非一度行かねばならぬが、おまへが来てからにしようと思つてゐる。でない留守にでも来ては氣の毒だから。洗礼の事は田中王

堂氏に学校であつたから、座談的に尋ねたが、氏は二度洗礼をうけたさうだ。しかし今はクリスチャンではないと公言しておられた。またその席にゐたある人は、洗礼をうける前はどうしても洗礼をうけなくてはキリストが分らず、眞の宗教に接しられないやうな気がして、遮二無二に受けたが、さて洗礼をうけてみると今度は余りに馬鹿馬鹿しい気がして、今では洗礼どころか教会へさへも行かなくなつたといつてゐた。併し二氏とも聖書に親しむ事は今も昔も變りがないさうだ。要するに信仰が進むと洗礼なんでものは馬鹿馬鹿しくなつて来るのだ。何度もいふやうに眞に宗教を考へ、眞に神を思ふ人は直接神に迫つて行くのであつて、間に教会だの洗礼なぞといふ中間物は入れなくなるのだ。洗礼のことについては自分はもう言ふだけのことは十分にいつた。保護者としての務めは十分に果したつもりだ。それでもおまへが猶うけるといふなら私はそれ以上もういはない。

(大正八年十月二十二日付、有三からはなあて書簡)  
以上、これまでざつと見て来たように、有三にしてみれば思いもよらぬ強制離婚から約半年にわたる、はななどの別居期間中に、有三がはなに宛た膨大な量の書簡にまず驚かされる。と同時に、必死の思いで書き送つた有三の熱意のほどが、はなならずとも読む者にひしひしと伝わってくるあたり、全くもつて見事と言う以外にない。こうした有三の氣迫に満ちた一言一句、心を洗われるやうな眞率さに、無論はなは感動した結果、終生洗礼は受けずじ

まいに終わつたし、父増次郎からは「山本へ復帰するなら勘当する」とまで宣告されたにもかかわらず、自らの意志で大正八年の暮れには、有三のもとに帰る決断を下し実行したのであつた。そして、このような事件があつたおかげで有三は有三なりに、キリスト教や聖書に関心を持ち、種々学ぶところがあつたようだ。その結果が、大正九年に発表された『生命の冠』『嬰兒殺し』あるいは改作『女親』といつた一連の戯曲となつて現われたと見て、まず間違いないさうだ。

#### 注

(1) 永野賢『山本有三正伝』上巻、未來社(昭和六十二年)所収。  
以下、有三からはな宛の書簡、本田増次郎から有三宛書簡などすべて原文は、この本によつた。

(2) 「娘の名の由つて来れる熊本癲院の創立経営者なる英人ハナ・リデル嬢は私が五十四年来接触して感化を受けた女人中の尤も偉なるものですが……」(大正八年一月四日付、本田増次郎から有三あて書簡)

(3) 父増次郎は書簡の中では娘のはなを「花子」と記していたのだが、婚約中の有三と、はな本人の会話の中で「花子」はどうも平凡だから「華子」にしてはどうかと決まり、父に相談したところ、「花子の名は如何にも月並です、本人も私も變へた方がよからうと考へて一時静枝と申して居ましたが芸者によくある名前だとこれ程なく中止しました華子と書くよりもイツソ思ひ切

つてもっと有意義な名をつけておやり下さいませ」(大正八年一月四日付、増次郎から有三あて書簡)と増次郎も承諾したので、山本に嫁してからののはなは、ずっと華子で通したといういきさつがある。

(4) 有三はこうした懷疑の念から生じた問題をテーマに、丁度この時期いくつかの作品を構想執筆中で、決して彼なりに満足のいく解決が出来たわけではないけれども、翌大正九年には『生命の冠』と『嬰兒殺し』という二つの作品を完成し、発表した。このように見てくると、この約半年間にわたる妻はなどの別居体験は、戯曲作家としての有三にとつて決してマイナスではなかった。

(5) その後も「大罪」については、『大罪』といふドラマは是非この夏中に書きたいと思つてゐる」(大正八年七月七日付)「今しきりに創作気分浸つてゐる。しかし『大罪』は余りに深い問題だからもっともつと考へようと思ふ」(大正八年七月十三日付)などと、はなあての手紙の中に出てくるが、しかし結局この『大罪』という作品は書かれず、大正八年の夏休みには『未決監』の方の筆がすすみ『嬰兒殺し』としての脱稿を見たわけだ。

(たなべ・ただし 大阪産業大学非常勤講師)